



HFHJ Newsletter

ハビタット・ジャパン ニュースレター

第26号 2012年7月発行

世界の現場から

時代の変化を捉えた支援に向けて。

2010年10月31日、世界人口が70億人を突破したというニュースが世界を駆け巡りました。1950年に25億人だった人口は僅か半世紀で3倍近くに膨れ上がり、しかしその約12%にあたる8億3千万人もの人々が、いまだ劣悪な住環境での暮らしや家のない厳しい生活を強いられていると言われています。そして現在も、都市化によるスラム居住者、自然災害や国内紛争による国内避難民の増加など、世界各地でその深刻さは増えています。このまま住宅や生活環境が改善されない限り、2020年にはその数は9億人に上るとされ、ハビタットにとっても貧困住居問題への取り組みは今まで以上にその重要性を増しています。

インド洋沖大津波からの教訓

ハビタットは、米国ジョージア州アメリカス近郊におけるコミュニティ内の人種差別問題解決を目的に、非営利・無利子を原則としたシンプルで適切な住居を建築したことから、その活動を開始。低所得者が住居を手頃な価格で購入できることを可能にする地域コミュニティ支援として、コンゴ民主共和国(旧称ザイール)を皮切りに(右上写真)、世界に活動を広げていきました。そして今から36年前の1976年、NGOとして団体を発足。2004年には約100の国と地域で活動を展開をするに至り、

2011年には累積支援世帯数が50万世帯に到達するなど、貧困住居削減の分野で大きな役割を果たしてきました。

しかし、22万人もの死者を出した2004年12月のインド洋沖大津波は、団体設立以来続けてきた開発支援だけでなく、緊急支援にも力を入れていくという転機をもたらしました。以後、人口増加、気候変動、そして自然災害といった脅威が世界を席卷。俊敏なリスク対応と、緊急から復興までの持続的な支援といった実質的対策が求められている今日、パキスタン、中国、フィリピン、インドネシア、ベトナム、カンボジア、チリ、ハイチ、米国といった世界各地で発生した災害に対応してきました。

これからの支援の在り方とは

奇しくも、日本もその例外ではないこととなり。2011年3月11日、私たちは身をもって知ることとなりました。東北地方太平洋沖で発生したマグニチュード9.0を記録する大地震。またその直後に太平洋沿岸部を襲った大津波により、一瞬にして多くの方々の人生をも根こそぎ奪う未曾有の大災害となった東日本大震災。ハビタット・ジャパンも、被災後すぐに支援活動を開始しましたが、その活動には、これまでハビタットが培ってきた海外での経験・ノウハウ



ハビタット最初の海外住居支援
@コンゴ民主共和国
写真右は団体設立者ミロード・フラ

を生かしてきました。

今日のグローバル化の進展により、多くの社会問題が様々な原因の複合により発生しています。それゆえ、ハビタット・ジャパンの活動も、例えば内戦後の国内避難民の再定住に向けたスリランカ事業、仮設住宅での生活サポートや一日も早い帰宅を目指した東北事業、ボランティア参加による海外住居建築支援活動など、多岐にわたっています。しかし、改めてその中身を見ると、その全てに共通しているのは、常に「自立支援」を目指した解決策を提案し、地元住民の方々と共に自立の道を目指す、というハビタットの原点がそこにはあります。

ハビタット・ジャパンは今年で創立10年目を迎えますが、次の10年もこの原点を忘れず、住宅分野のリーディングNGOとして、人々の生活、未来をサポートしていきます。

※文中データは2010年発表の国連人間居住計画の統計に基づくスラム人口



5月、岩手県大船渡市。被災した住宅の修繕事業と並行して、収納スペースが非常に限られている仮設住宅に物置を製作する活動を開始しました。ゴールデンウィークには、休暇を利用し集まったボランティア40名近くが、入居者らと一緒に組み立て作業に参加。10棟の物置が出来上がりました。完成した物置は入居者の立会いの下で玄関脇などに設置され、早速、家財などが収納されました。今回活動した仮設住宅では、全入居世帯の6割を超える約40の世帯から要望が寄せられており引き続き製作を行うと共に、今後は同市内の他の地域においても活動を広げていく計画です。

東北の現場から

復興への兆し。～地元住民の未来を見つめた言葉から～

支援対象者からの便り

2月から岩手県大船渡市で実施している被災住宅の修繕事業。工事にかかる費用の一部を補助することで、風雨や寒さをしのぐための応急修理や、仮設住宅を出て一日でも早く自宅に戻ることを希望する被災者の自立をサポートしています。現在、40世帯の修繕が完了。これにより仮設住宅から自宅へ戻る方も出てきています。

6月には、今回支援を受けた一人、佐々木元夫さんよりお礼の手紙が届きました。「この度のご支援大変ありがとうございました。おか

げさまで仮設住宅からの引越も済ませ、元通りの生活とはいきませんが、落ち着きを取り戻しつつあります。お金もさることながら、みなさんの温かい気持ちに救われたところは大きいです。心より感謝申し上げます。庭の躑躅(つつじ)も咲き始めました。近くにお越しの際には是非お立ち寄りください」。

震災前は水産加工業を営んでいた佐々木さん。自宅と共に工場も津波の被害に遭い、事業をたたまざるを得ない状況に追い込まれました。自宅は一階全体が被災。2012年3月に

支援を受け、4月に修繕工事が完了。仮設住宅を退去し、5月から自宅での生活を再開しています。

ハビタット・ジャパンは、(特活)ジャパン・プラットフォームなどの協力の下、今年10月までに120軒の修繕完了を目指し活動しています。

公民館の修繕支援

津波で大きな被害を受けた宮城県東松島市野蒜(のびる)地区。自宅を修繕あるいは再建した住民が少しずつこの地域に戻ってきています。住民が集い、お互いの交流を深め、地域の将来を共に考える場所として利用してもらうために、ハビタット・ジャパンは被災した亀岡公民館の修繕活動を行っています。

活動は4月に開始。浸水により傷んだ床や壁の撤去、清掃、消毒を行い、続いて電気工事、水道工事、窓の取付けを実施しました。

そして5月下旬には本格的な修繕がスタート。新しい床や天井、壁を取り付け、内部の塗装作業を行いました。また、日当たりの良い集会室の外には新たにウッドデッキスタイルの階段を取り付け、開放感あふれるエントランスを確保。地域の人々に親しんでもらえる公民館を目指しています。

現在、仕上げとして、公民館周辺に残る細かながれきや雑草を取り除く清掃作業を行っています。亀岡東地区の和泉区長が、「これからは住民同士がより多くのコミュニケー

ションを取っていくことが必要。そのためにはこの公民館を使っていきたいですね」と息を弾ませながら話す通り、地域の未来に欠かすことのできないコミュニティスペースの再生がもうすぐそこに近づいています。

Team J-Habi@上智大学 始動！

全国18の大学キャンパスに、1,500名を超える学生が所属するハビタット・ジャパンの学生支部(キャンパス・チャプター)。「世界から貧困住居をなくす」を合言葉に、国内外を問わず活発な活動を続ける彼らの輪に、新たに上智大学の支部が加わりました！

ハビタットとの出会いから…

僕とハビタットとの出会いは、高校生の時。当時通っていた高校にハビタットのクラブがあり、国際的な取り組みに関心があった僕は、実際に外国に行ってボランティア活動を行えるハビタットに興味を持ちました。初めてハビタットの海外

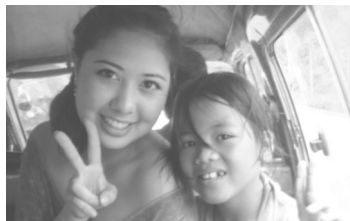


外住居建築活動(GV)に参加したのは、高校2年生の時でした。活動場所はモンゴルのダルハンという町。生まれて初めて見る地平線まで続く草原の景色に感動したり、ハビタットの現地スタッフに温かく迎え入れてもらったりした結果、もう一度GVに行きたいとの思いが次第に強くなっていきました。しかしその後入学した上智大学にはハビタットのクラブがなかったので、自分で団体を立ち上げようと決め、仲間を募って「Team J-Habi」を立ち上げました。そして、「もう一度」との思いを胸に今春、マレー

シアでの活動をついに実現させることができました。(Team J-Habi 設立時代表 川本 拓矢さん)

素敵な仲間と素敵な出会い

5歳の頃からずっと外国で暮らしていた私は、一年前、上智大学へ入学した当時、ほとんど知り合いがいませんでした。そんな頃、川本さんがGVチームのメンバーを募集しているのを知りました。海外でのボランティア活動にも興味はあり



ましたが、何より「楽しそうな仲間と、英語でも大丈夫そう」と、Team J-Habiのメンバーになることを決めました。そして1年を経たこの春、マレーシアのコタキナバルへ。準備段階からチーム一丸となって活動に励み、現地でも最高の時間を過ごすことができました。豊かな自然、現地の子供たちとの素敵な出会いも忘れられません。川本君からチームを引き継いだ今、素敵な仲間たちと出来るだけ多くのGVに行くことを大学4年間の目標に活動を続けています。(現代表 Elleese Aokiさん)

ハビタット・ジャパンでは、若者育成支援プログラム(Youth Program)を通じて、Team J-Habi の活動をサポートしていきます。

中学・高校で 国際協力 ワークショップ

ハビタット・ジャパンでは、中・高校生を対象に、国際協力を題材にしたワークショップ講師派遣を実施しています。(講師派遣依頼受付中)

例えば…



～横浜商業高校訪問～

春秋と年間を通じて2回に渡り、同校の国際学科1年生約40名を対象に授業の一環として1時限分を利用したワークショップを実施。まずは世界の貧困住居問題について、活動記録ビデオを通じて、日本での暮らしからは認識しづらい世界の現実について理解を深めました。

続いて、「誰もがきちんとした場所で暮らせる世界」の実現を目指し活動続けるハビタットの取り組みを、現場の写真を交えて紹介。グループワークでは、実際に海外建築ボランティアとして参加した大学生のお兄さん、お姉さんから生の声を聞きながら、質問や疑問を投げかけました。

参加した生徒からは、「ボランティアは気持ちと行動力があればできると気付いた」、「自分でもできる自分なりの支援を見つけない」など力強いコメントが寄せられ、グローバル時代に求められる国際的視点や異文化理解を育むセッションとなりました。

Sri Lanka人道支援 報告

100軒のみらいが建ち上がった北部マナー県、支援したのは、家、そしてふるさとへの想い。

2011年4月から、(特活)ジャパン・プラットフォームと協力して実施してきた紛争帰還民の支援事業。6月25日には、第3期として建築する15軒の住宅が完成し、累計建築数が100軒を超えました。現場では、とくに内戦で家族を失ったり、障害を負ったりした人々を支援。住民の間ではいまだ紛争中のトラウマなども残る中、こうした家族が安心して暮らせる家づくりを行いました。

現地では、多くの帰還民が劣悪な住環境での生活を継続。応急的に住まうシェルターなども度重なる豪雨や暴風によって老朽化し、中には雨風を十分に凌ぐことすらできないものも少なくありません。

今回支援を受けたスーブラマニヤム(Suburamaniyam)さんは、「長く続いた内戦と貧困のせいで、私たちは今まで一度もブロックでできた、きちんとした建物で暮らしたことがありませんでした。ハビタットハウスは、テントや応急シェルターと違って丈夫なので、破れたところをいつもつぎはぎして暮らすような生活はもうなくてよいですね。これから家族でこの家で暮らし、前へ向かって頑張っていけると思うと、うれしさいっぱいです」。(写真: 小さなお店を開店するため、コアハウスを増築したホームオーナー)

7月以降は、新たに水や衛生に関する支援を開始。井戸掘りやトイレ建設を通じて、紛争帰還民の生活環境を改善していく計画です。

ハビびと

兵 庫県丹波市で石材業を営む中川清一さん、ジトウマルガさんは、夫婦そろってハビタット・ジャパンのハウスサポーター。5年前、娘がボランティア活動に参加したことをきっかけにハビタットを知った。娘を通じて世界の貧困住居問題について少しずつ理解が深まり、気付いた時にはハウスサポーター登録をしていたという。

「ハビタットは、本当に支援を必要としている人の役に立っている。それを支えたかった」と語るジトウマルガさんは、エチオピアの出身。日本人である清一さんと結婚し、生まれたばかりの娘を連れて来日してから30年。経済的に恵まれた日本に暮らしながらも、故郷のエチオピアをはじめとした世界の

中川清一・ジトウマルガ夫妻 ハウスサポーター

貧困問題に常に心を痛めていた。「自分にもできる貢献を」と、ハビタット・ジャパンの支援者になることを決めた。

一方、清一さんは、ハビタットの「家」に焦点を当てた活動を評価しているという。職業柄、日本国内においてNGOが建築活動を行うことの敷居の高さを知る彼は、東北支援においてハビタットが直面する困難も理解しており、だからこそエールを送りたいと語る。「やはりハビタットには、他の団体にはできないこと、つまり家を建てたり、直したりすることで日本を支えてほしい」。

震災後、夫妻はハビタットの活動をもっとサポートしたいと、店頭に貯金箱を置き、周囲にも支援を呼びかけ始めた。夫妻からハビタットの活動について話を聞いた来客者

から募金をいただくことも少なくないという。

「本当は私もボランティアに行きたい。でも時間を見つけることが難しいので、別の方法で取り組みに参加することにした」と語るジトウマルガさん。たとえボランティア活動には参加できなくても、ハビタットのファンでありたい、そんな夫妻のあり方がきっかけとなり、サポーターの輪が広がり始めている。



ハウスサポーター募集中！

ハビタット・ジャパンのハウスサポーター(会員)は、ハビタット・ジャパンが行う世界各国の住居建設活動および災害支援活動を通じ、月々1,000円で「誰もがきちんとした場所で暮らせる世界」の実現を支援します。



例えばスリランカでは…

- 1,000円でレンガ20個
- 3,000円で壁1枚
- 5,000円でドア1枚

という具合に買うことができます。また日本では、東日本大震災の被災者がこれまでの生活を取り戻すための大きな支えになります。

年次報告やニュースレターによる活動報告を通じて、あなたもハビタットと一緒に「世界を変える」一員になってみませんか？

詳しくは近日公開予定の会員専用ページをご覧ください。(電話、メールによるお問い合わせもお待ちしております。)

海外ボランティア募集中！



今夏も、地球の歩き方とのコラボ企画「タイの家族と一緒に家を建てる活動8日間」を行います。活動場所はバンコク郊外。貧困や自然災害に苦しむ人々のために、現地家族と協力して家を建てます。建築経験や専門技術は一切不要！建築活動の他にも、孤児院や学校訪問、バンコク市内観光など、盛りだくさんのプログラム。参加者のほとんどが個人参加で、日本人スタッフも同行。初めてでも安心です。共に汗を流し、異文化に触れ、世界の現状を学ぶ。そんな活動に参加してみませんか？

【活動日程】9月4日(火)～9月11日(火)

詳しくはホームページで！

東北ボランティア募集中！

復興に向け、多様化する現地ニーズに因るため、引き続き東北災害支援ボランティアを募集しています。1日から参加可能。特別な技術や専門知識も不要です！

【活動地域】

宮城県東松島市、石巻市、その他地域

【活動内容】

被災家屋の清掃(がれき撤去、解体)、コミュニティスペースなどの修繕、仮設住宅内での交流の場の提供・参加など。

【活動日程】

随時申し込み受付中。

詳しくはホームページで！



編集後記

GW期間中、連休を利用して参加されたボランティアの皆さんと、岩手、宮城両県で支援活動を行いました。昨年の今頃、大変多くの方々にご参加・支援を頂きましたが、今年に入り、ボランティア数は激減、昨年の1割にまで落ち込んだとの報道もあります。まだまだ残る現地ニーズに対して支援不足の感否めず、ハビタットのように地域再建の計画から実施まで、住民の方々と共に行う団体にとっては、現地の期待に迅速に応えられないことが大きな悩みの種となっています。「支援の役に立つ、立たない」ではなく、「ボランティア」という存在自体が、今後の復興に不可欠であることを広く伝えていきたい。このことが、私たちの役割であると感じています。ご参加、ご協力をよろしくお願いいたします。(事務局)



〒151-0051
東京都渋谷区千駄ヶ谷1-13-11 CHARI千駄ヶ谷4F
Tel: 03-6459-2070 / Fax: 03-6459-2071
URL: www.habitatjp.org / Email: info@habitatjp.org

発行人：小田 浩
編集人：山崎顕太郎、山本真太郎、中川ミミ

ハビタット・フォー・ヒューマニティ・ジャパン は、住宅を建てることでコミュニティを築く自立支援型NGOとして、これまで、人種、宗教、国籍に関係なく世界約100カ国で50万軒余の住宅建築支援を行ってきました。そして現在、世界中で21分に1軒のペースで住宅を建てています。